



[氏 名] 河合 皓太
[出身都道府県] 富山県
[卒業期] 35 期（平成 23 年度卒）



いのちの授業

『なぜ医者になったか？』

この問いに皆さんは何と答えますか？「困っている人を助けたい」というのが僕の答えであり、医者という職業を選んだのにそれほど深い意味はありませんでしたし、自治医大に入学したのも授業料がかからないというのが大きな理由でした。

『地域医療・家庭医療との出会い』

富山 35 期生として卒業した後、富山県立中央病院で初期研修を行い「病気を治す」術は多く学びました。ただ、3-4 年目に地域で働いた時、「病気を治す」のは目的ではなく「人を助ける」ための 1 つの手段でしかないことに気付き家庭医療・総合診療の道に進むことにしました。その中で、医者だけで目の前の患者を幸せにはできないということを知りましたし、死に携わるのも医者の大事な役割だと感じました。そして今、医師 3 年目にお世話になった地域の総合病院で病院家庭医として働いています。



『患者さんの最高の最期のために』

「家で最後まで過ごしたい」そう語る患者さんは多いです。でも実際に自宅で最期を迎える人は2割もいないのが現実です。これには多くの理由があると思いますが、意思の共有不足、死に対する恐怖などはあるでしょう。住民が死について真剣に考え話し合える風土を作りたい。そんなことを思って始めたのが中学校での「いのちの授業」でした。

『いのちの授業と住民教育』

人は必ずいつか死にます。死は特別なことではありません。にもかかわらず人は「死」について語ることを厭います。学校で「死」について学ぶこともありません。そんな環境では意思の共有もできないでしょうし、怖い、避けたいと思うだけのものになってしまうでしょう。このままでは目の前の患者の「最高の最期」を作り上げられないと感じたため、町の教育委員会と協力して中学校で「死の教育」を始めました。また、地域住民に対しては人生会議 (Advance Care Planning) に関する講演も繰り返して行なっていますし、町としてエンディングノートを作成しようということでその監



修にも携わっています。これらの活動はすぐに効果を発揮するものではありません。長年かけて一つでも二つでも種が芽吹けば良いな、笑顔で最期を迎えられる人が増えれば良い



な。そんな気持ちでこれからも続けていきたいと思っています。

『何がしたい？それをやり続けよう』

僕がやりたかったのは「患者さんの幸せ」をみんなで作り上げること。そのための活動のいくつかが上記ですし、臨床の中では「臨床倫理認定士」として院内の臨床倫理問題や臨床倫理教育に日々携わっています。「子どもたちの通いの場を病院内に」という野望もあります。患者のため、地域のために必要だと思うことをやり続ける。そうやって自分も地域も成長していくのだろーと思いますし、やりたいことが実現しやすいという側面が地域にはあると思っています。